

ALEXANDRIA

恵泉女学園大学図書館報 アレキサンドレイア

2011. 4

特集 教員から新入生へ 「私のおすすめ本」

Library letter



no. 47

Keisen. Univ. Lib

『終点のあの子』

柚木 麻子著

文芸春秋 2010

林 浩平 日本語日本文化学科

「オール読物」新人賞を受賞した「フォーゲットミー、ノットブルー」を含む四篇の短篇小説からなる『終点のあの子』は、文学の世界に関心のある女子大生にはぜひ読んでもらいたい一冊です。都内にあるプロテスタント系の女子高校を舞台に、それぞれが個性的な女子高生たちが同級生らとの友情をどんな具合にはぐくみ、またどんなふうに友情が屈折していくのか、その微妙なところの動きをととても柔らかく繊細なタッチで描き出しています。本の帯に書かれたコピーは、「女子高生の友情は、すぐに敵意にかわる」。まさにその言葉通り、揺れ動きやすく傷つきやすい思春期の女子のこころの世界を目の当たりにして、「そうそう」とか「あ、言えてる」と共感する読者もきっと多いでしょう。四つの短篇はそれぞれ独立した作品として十分に鑑賞に耐えますが、登場人物が重なっていて、全体でひとつの小説作品としての統一感を作り出しています。女子高生を主人公にしたただの学園小説と軽く見てはいけません。オジさん世代が読んでも、高校での日常を送り、夏休みを近所の図書館で過ごし、また学校では禁じられているアルバイトを社会への冒険として敢えて始めたりする女子高生の生き生きした姿には強いリアリティーがあって、確かな説得力を備えた劇(ドラマ)が生れているのを実感します。

作者の柚木麻子さんは1981年生まれで、立教大学で文学を学んだそうですが、中学と高校は恵泉女学園に通いました。ですから、小説の舞台となる高校は恵泉女学園がモデルとみなしてよいでしょう。となるとなんとなく親近感を覚えますね。現代の高校生の人間関係をテーマにした小説といいますと、2004年に最年少の19歳で芥川賞を受賞して話題になった綿矢りささんの『蹴りたい背中』が有名ですが、私見では、この『終点のあの子』のほうが作品としての完成度は高いのではないのでしょうか。そんな一冊です。強く推薦いたします。

『アフリカの日々』

アイザック・ディネーセン著
横山貞子訳

佐谷 眞木人 日本語日本文化学科

デンマークの貴族の家庭に生まれた著者が、アフリカ、ケニアのコーヒー農園を経営し、そこから離れるまでの日々が、詩情ゆたかに綴られた小説です。アフリカの自然や動物の描写、現地の人たちとの交流、そして作者の思索の跡が、静かに穏やかに、そして比類のない美しさで記されたこの小説は、私たちに多くのことを教えてくれます。大学生の時に出会ったこの本は、私にとってかけがえのない一冊になりました。

この小説は、ケニアがまだイギリスの植民地だった時代に書かれています。作者もまた、農園の経営者として、現地の人たちから「搾取」する側にあります。それは、現代社会から見れば、犯罪的な行為と映るかもしれません。そういう思い込みのある人は、ぜひ、この本を読んでください。そこに描かれた作者と現地の人々との暖かい交流は、単純な支配と被支配の関係ではないことが理解できると思います。

ここに描かれているのは、西洋近代の側から見たアフリカの姿です。そこには数多くの偏見や誤解が含まれていることでしょう。しかし、それでは、私たちは異文化に属する人たちを本当に「理解する」ことなど出来るでしょうか？ 作者は、アフリカの社会に心から敬意を払い、ヨーロッパにはない数多くの美質を認め、そして、そこから学ぼうとしています。それは、私たちが異文化と向き合う際に最も大切なことからです。たとえ、どこまでいっても理解できないとしても、私たちは相手に配慮することができるし、思いやったり想像をめぐらせたりすることもできるのです。

私はこの本は、今の大学生に理解してもらえないのではないかと心配していました。しかし、昨年、ある授業でこの本をレポートの課題の一冊に指定したところ、思いがけず素晴らしいレポートが、いくつもありました。とても嬉しかったです。この小説を読んだ大学1年生のレポートを引用しておきます。「異国の土地で、しかも自己の孤独の中であって、理解できない振る舞いを目の当たりにしても、時間をかけて相手を観察し、冷静に思いやるディネーセンの姿勢は、グローバル化が進んだ現代にこそ、もっと見直されるべきではないかと思った。」



斎藤美奈子『妊娠小説』のすすめ

篠崎美生子 日本語日本文化学科

新入生の皆さん、皆さんの中には、高校3年の国語の教科書に載っている森鷗外『舞姫』の難しさに苦しんだ人もいることでしょう。でも、そんなことで近代小説を嫌いにならないで！ 日本近代文学担当の私から、『舞姫』などの小説を面白く読ませてくれる本を一冊紹介いたします。

斎藤美奈子『妊娠小説』——はて「妊娠小説」なんてジャンルはあったかな？ いぶかりながらこの本のページをめくると、「『妊娠小説』とは「望まない妊娠」を搭載した小説のことである」という著者独自の定義が掲げられています。そしてこのシンプルな定義にあてはまる第一の小説として、『舞姫』が挙げられているのです。ドイツ留学(駐在)中に職を失い帰国できなくなった豊太郎と同棲中の少女エリス。エリスは妊娠を喜び、子供によって2人の絆を深めようとしますが、エリスに黙ってひとりで帰国し復職する道をさぐる豊太郎にとって、たしかにそれは「望まない妊娠」でした。なんと不実な豊太郎！ しかしこの本は、単に豊太郎の不実やエリスの自立心の乏しさを責めるのではなく、ここに「妊娠が男のものになった」時代を見るのです。妊娠が「女の問題」に過ぎなかった時は過ぎ去り、年若な女性を妊娠させることがその男性の名誉や将来を脅かす一大事になった「近代」という時代の反映を見るのです。

この本はこの後も、「男」にとっての「妊娠」という観点から、日本近代の大量の「妊娠小説」を軽妙な筆致で分析していきます。斎藤氏によれば、「妊娠」を恐れる「男」の立場を代弁するかのよう、その後の小説にも、〈生みたいと主張する女→困惑し拒否する男→しかたなく中絶する女→中絶によって傷つく女〉というステレオタイプが繰り返されているのだそうです。村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』にもその変奏が見られるというのですから、この物語パターンがいかに深く日本の小説に根を張っているかが知られます。

でも根深いと言えば、そもそも私たちの脳にこそこのパターンは染みついているのかもしれない。今だにドラマの中で、妊娠したヒロインがパートナーに「生みたいの、いいでしょう」と許しを求める場面に出会いますが、あれを不思議と思わない私たちこそ「妊娠」は「男」の管理すべきものと思い込んでいる張本人かもしれません。

さあ小説を手がかりに、自分の脳をひっくり返していきましょう。



ショートショートのお勧め

高濱俊幸 文化学科

いま読みかけの本を紹介します。サマセット・モームの『コスモポリタン』は、1920年代に同名の雑誌『コスモポリタン』に掲載された短編を集めたものです。短編にも比較的長いものから文字通り短いものまで色々ですが、これは見開き2ページに収まるようにという雑誌編集者からの依頼があって書かれたもので、本当に短い小説がたくさん入っています。こういう超短編の小説は「ショートショート」(short short story)と呼ばれ、『コスモポリタン』をその先駆けとするようです。私自身の読書経験では、この形式の小説に初めて触れたのは、星新一のSF短編集だったように記憶しています。「ショートショートの神様」と言われるだけあって、巧みなストーリー展開が印象的でした。また、ほぼ同じ頃に、川端康成の『掌(てのひら)の小説』を読んだはずですが、掌に収まるほど小さな作品という意味でしょう。川端自身詩の代わりに書いたと言うだけあって、なんだかもの悲しい気分が溢れています。2010年の3月に、同名の映画となって公開されたようです。そういえば、英語の教科書に出てきたオー・ヘンリーの『最後の一葉』(The Last Leaf)もショートショートの一つでしょう。いずれも長編大作と違ってズシリとした重みはありません。多くの作品は読んでまもなく忘れてしまいます。ただいくつかの作品が妙に記憶に残っていきます。改めて読み直そうと思って、どこにあるかと探してみても、見つからないこともよくあります。ひょっとして、読後に長い期間をかけて、少しずつ、作品の周りにイメージを膨らませていたのかもしれない。

* 本文のモームの短編集のタイトル『コスモポリタン』は恵泉の図書館所蔵の『W・サマセット・モーム全集』(龍口直太郎訳 1955年刊)に依るものです。

編集後記

今、図書館内では今号執筆して頂いた先生方を含め、先生方から新入生への「おすすめ本」の展示をしています。是非ご覧ください。(A)

